

## 絵は私の身体を通して世界を見る

私は実際の風景をスケッチをする代わりに文章で書き留め、その文章を基にして絵を描いています。

この制作方法は、私を自分の中で無意識に信じてしまっている、写真的な描写や、ルネサンスの遠近法などの「正しさ」から自由にしてくれて、私はより深くものを見て描くということはどういうことなのかを考えることが出来るのです。

私は以前に作品に「絵が見る世界」というタイトルをつけていました。キャンバスが絵の網膜であるとしたら、私は眼球、或いはカメラのレンズのような役割を果たしていて、キャンバスに描かれるものは、私が見る世界を描いているのではなく、私というレンズを用いて絵が見ている世界なのではないか？そのように考えたからでした。

この制作方法を続けていて、私は最近、絵は私を通して描かれているのだということを強く実感するようになりました。例えば、ある時に車で山の頂上まで行って書き留めた文章が、別の時に他の山を歩いて頂上まで登った時に、山を見る自分の感覚が変わってしまい、今までの経験や記憶、書き留めた文章に対する感覚も変わるということがありました。すると絵を描く際の意識も変わってゆきました。絵の具をキャンバスに塗る時の感覚や、色の選択が以前と異なっているのです。それは、以前が間違っていて、今は正しく、よく見えているということではないのです。私が変わると見たものが変わる、世界が変わるのです。

自分自身をカメラにレンズを扱うように見ることで、自分の身体が、見るということに大きく影響しているという、当たり前すぎて考えもしなかったことを強く感じたのです。私が私を意識しようとしまいと、見るという行為には、私の経験や記憶、体調などが大きく影響していて、絵はその私の身体を通して世界を見ているのです。

